

新型コロナウイルス感染症対策のため、当分の間『岐大通』の配布方法はこれまでと異なります。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

2020J3 ■順位表■第17節

勝点、得失点差、得点、失点、岐阜戦の戦績（岐阜から見て）

（注：*印は消化試合が1つ少ない）

*1	秋田	40p	+23	27	4
2	熊本	38p	+16	34	18 HO
3	長野	32p	+13	28	15 H●
4	鳥取	30p	+4	22	18 AO
5	藤枝	29p	+4	33	29 A●
*6	岐阜	28p	+8	26	18 --- ---
7	鹿児島	27p	+6	28	22 AO
8	相模原	26p	-3	20	23 A●
9	今治	25p	+4	16	12 H△
*10	富山	24p	+8	27	19 AO
*11	八戸	18p	-6	21	27 AO
12	YS横浜	18p	-7	25	32 HO
13	岩手	18p	-13	16	29 H△
14	沼津	17p	-6	18	24 A△
15	G阪23	15p	-9	24	33 HO
16	福島	15p	-10	21	31 AO
17	C阪23	10p	-20	13	33 A●
18	讃岐	9p	-12	14	26 H△

※勝点、得失点差が同じ時は同順位とし、リーグ戦終了時に直接対決結果で決定（H&A実施完了時のみ）

次回HomeGame

第21節 vs.鹿児島ユナイテッド

10/11 (日) 14:00

@岐阜メモリアルセンター
長良川競技場

大酒場 ホームラン

名鉄岐阜駅前（三菱UFJ銀行隣り）
年中無休 午後3時から営業

TEL.058-263-5201

「いらっしゃいませ」より
「おかえりなさい」が似合う
アットホームな韓国料理店。

『チヂミ屋』は
JR岐阜・名鉄岐阜駅から徒歩3分。
休：月曜日

today's guest : アスルクラロ沼津

2019 J3 11勝6分7敗 勝ち点39:12位

直近の対決と結果

2020/09/06

J3 - 14節@愛鷹

沼津 1-1 岐阜

富樫佑太 scored.

ここ3試合の公式戦の結果

FC岐阜	アスルクラロ沼津
2020/09/22 J3 - 17節@富山 富山 1-2 岐阜	2020/09/22 J3 - 17節@愛鷹 沼津 5-0 C阪23
2020/09/19 J3 - 16節@長良川 岐阜 0-2 長野	2020/09/19 J3 - 16節@愛鷹 沼津 0-2 福島
2020/09/13 J3 - 15節@ブラスタ 八戸 0-3 岐阜	2020/09/12 J3 - 15節@A x i s 鳥取 1-0 沼津

アスルクラロ沼津

1990(平成2)年、沼津セントラルスポーツクラブとして発足し、静岡県リーグに在籍していた沼津香陵クラブの運営を引き継ぐとともに名称をアスルクラロ沼津とする。2014(平成26)年のJFLエクспанションに伴いJFLに加盟、東駿河湾地区からは1997(平成9)年から7年間JFLで活動したジャトコ(よく『ジャトコ』だとの指摘を受けるのですが、JFL加盟当時は『ジャトコ』です)以来の全国リーグ参加となる。2016(平成28)年のJFLで年間3位となり、翌年からJ3に参戦。静岡県の4地域すべてにJクラブが揃うことになった(静清地区に清水エスパルス、志太地区に藤枝MYFC、遠江地区にジュビロ磐田)。(吉田 鑄造)

●新型コロナウイルスの影響による短縮日程のため、3ヶ月未満の短期間で全34節の前半戦を折り返すことになった2020年J3リーグ。9/19(土)第16節・ホーム長野戦は、上位チームとの重要な一戦。前半はスコアレスドローで折り返し、後半に攻撃の勢いを強めた岐阜が長野ゴールに迫るが得点を奪えずにいて、相手をPAで倒してしまいPKに。これを決められ先制された岐阜は同点にすべく、さらに攻勢をかけるもののゴールを奪えず、逆に試合終盤にも失点し、0-2での敗戦。そして9/21(月・祝)、クラブからはゼムノビッチ監督の休養と、暫定的に仲田建二ヘッドコーチがチームの指揮を執ることが発表されたが、その翌日には、9/22(火・祝)第17節・アウェイでの富山戦が行われた。前半は両チームともなかなか攻撃の形がつかれずにいたが、岐阜はCKで先制点を許してしまう。しかし後半になると徐々に攻撃の形が出てきた岐阜は、後半60分のゴール前の混戦に#8中島賢星が頭で押し込んで同点にすると、後半78分に#10川西翔太がミドルシュートを決めて逆転。最後は富山の攻勢を5バックにしてしのぎきり、2-1。今季の前半戦最終戦で、今季初の逆転勝利を手にすることができた。

この2試合を1勝1敗としたFC岐阜は、勝ち点を28に積み上げ、順位も暫定7位から暫定6位に上げた。しかし、2位・熊本との勝ち点差は10、首位・秋田との差は12。雷雨で中止になった8/30(日)第12節の代替試合、10/14(水)のホーム戦で無敗の首位・秋田に勝利できたとしても、勝ち点は31。逆に長野に負けたことで、優勝・J2昇格争いの2チームとの勝ち点差は離れてしまっている。

そして、(岐阜は1試合が未消化だが)J3は前半戦17試合を折り返し、シーズン後半戦へ突入する。今後の岐阜は、ホーム戦で秋田に勝利した上で、残り17試合で2位との勝ち点差を逆転しなくてはならない。しかし、自分たちが勝ち続けたとしても、上位チームが勝ち点を落とさない限り、その差は縮まらない。非常に困難で厳しい状況だが、この壁を乗り越えなければ、J2昇格への道は見えてこない。自分たちの力を信じて、目の前の1試合を確実に勝ち続けるしかない。

さて、シーズン後半戦の初戦となる今節の対戦相手は、アスルクラロ沼津だ。2017年からJ3に参入し、3位・4位と上位の成績だったが昨季は12位。そこで新たに今井雅隆監督を指揮官に迎えて心機一転を図った今季だが、調子が上がらずに現在は14位。しかし、まだ1か月も経たない今季前半戦、9/6(日)第14節の対戦では、FC岐阜は5連敗中だった沼津に自分たちのミスで先制点を許してしまう。試合終盤に何とか追いついたが勝ち越すことはできず、1-1の引き分けに終わっている。その後、沼津は2連敗したが、前節・C大阪U23戦では5-0の快勝。沼津の攻撃陣は自信を強めて長良川に乗り込んでくるだろう。その中でも、4得点の#35渡邊りょうは、前回の対戦で得点されていることもあり、最も警戒すべき選手だ。また、新潟から育成型期限付き移籍で加入したばかりの#33秋山裕紀も早速1ゴール。今季のJ2新潟で11試合に出場していた選手で、こちらも要注意だ。一方の岐阜は、静岡県沼津市出身の#31松本拓也を柱とした守備陣が、前回の対戦の反省も踏まえて沼津の攻撃陣を零封した上で活性化させた攻撃陣がゴールを奪い、前回の対戦の雪辱を果たさなくてはならない。今のチーム状況は、僕らサポーターにとっても苦しいものだが、それだからこそ、現段階で僕らにできる応援をして、選手たちの背中を押そう。タオマフ・ゲーフラの掲出(振るのは禁止)や手拍子・拍手で、勝利を掴むために最後まで走り続ける選手たちを支えよう。(ささたく)

投稿募集!! gidaidohri@gmail.com

【第16節】岐阜0-2長野

●上位・長野との、いわゆる“勝ち点6マッチ”。そしてトップスポンサーのサンクスマッチ。9月の中旬に入って急に涼しく過ごしやすくなった4連休の初日のナイターで、観客の出足も上々。普段以上に、勝ちたい、勝たなければならないという気持ちが強まる試合。

試合は、序盤から長野がボールを保持して攻める展開。しかし岐阜も堅い守備ブロックを形成して、長野のボールを奪い、あるいは跳ね返す。しかし、セカンドボールをことごとく長野に拾われ、再び守備の時間になってしまう。そんな膠着した中盤での緊張した攻防戦で、前半は終了。後半になると、プラン通り？なのか、岐阜が攻勢を強める。何度か惜しい場面があるが、なかなか決定機がつかれない。『細部に神は宿る』という言葉があるが、ほんのボール数個分のパスやポジショニングの違いで、決定機が作れるか否かが決まる。よく選手がインタビューで「攻撃での共通認識が不足している」的なことを言っていたので薄々感じていたけれど、僕には『攻撃パターン練習をやっていない』のが確信的になってしまった。コロナ禍で練習見学が非公開だし、実際にどうなのかは分からないけれど、これだけ攻撃がチグハグになれば、そう思わざるを得ない。選手個々人のレベルが高いから、選手のセンスに任せた攻撃を…というのは、少なくともJ3レベルでは通用しないと僕は思っている。効果的な攻撃パターンをいくつか用意すれば、少なくともそのパターンは早く正確に実行できるし、そこからバリエーションも生まれる。例えば、1トップに#9高崎寛之を置いているのならば、そこにロングボールを当ててセカンドボールを2列目の選手が拾って押し上げる…長野や、あるいは他の対戦チームもよくやる戦術だが、そういったものが岐阜には無いならば、これはもう今後は厳しいシーズンになると言わざるを得ない。後半にPKを獲られたのは（少し誘われた感もあったけれど）仕方ないとしても、その後にチーム全体として『同点にするための共通認識』が無く、選手たちが迷っているようにも見えた。#11前田遼一を投入して#9高崎との2トップなら、もうパワープレイだと僕なら思うんだけど、それも徹底されていなかった。

長野が1点獲ってからは、相手のコーチがずっと何かを叫び続けて、それはもうやかましかった（苦笑）のだけど、対する岐阜のベンチは静かな状況で、それも不安になった。打開策が見いだせないからと下がってきた#10川西翔太がボールの受け手を探しているところを、複数の選手に囲まれて奪われてカウンター、そして更なる失点…なんという悪循環。結局0-2、今季J3最多観客数を達成しながら、非常に重苦しい、後味の悪い敗戦になってしまった。

現時点ではコロナ禍の影響で、スタジアムで大声を出すことは厳に慎まなくてはならない。僕はプーイングはしない派なのだけど、『もっとやれるだろ！』などとは叫んでいた。これほど、選手たちを叱咤激励できないことが苦しいシーズンになるとは……。（ささたく）

●前半の途中あたりから「もっと、優しく、丁寧に扱ってあげないとボールに嫌われちゃうぞ〜？」と、ボールを他のモノに置き換えても通用しそうな、人生訓的な感想を抱いていた。そして、至極妥当な内容と結果だった。長野の関係者やファン、サポーターの方には怒られるかもしれない。しかし、特に傑出したタレントがいるわけでもなく、目を見張るような斬新な戦術を取るわけでもなく、愚直に、ただひたすらにやろうとしていることを地道に繰り返す長野に対して、効果的な長野対策はもちろん、統一された意識、戦術がなく、個々のアドリブのみでゲームを進めるホーム・チーム。いかにサッカーの神様が気まぐれだったとしても、この試合の敗者が長野だったら理不尽すぎるだろうなあ、とさえ思った。岐阜サポ失格かもしれないが、本当に心底、至極妥当な結果だと思った。でも、特に怒りとか憤りの感情すら湧いてこない。それが、とても辛かった。

それでも、先制されるまではどちらに転がるかわからなかった。その均衡が破られるきっかけを作ったのが途中出場の富樫だったというのが、輪をかけてツライ。審判の判定は正しい。PKに値するファウルだった。ただ、それが劣勢を挽回するための交替で

出てきた富樫のプレーからというのが本当にこの試合を象徴しすぎて悲しかった。

ところが、だ。その淡々とした感情さえも吹っ飛ばすようなことが起きる。90分、アディショナルタイム突入時点での三枚替え。思わず、目が点になった。なんですか、コレ。2-0で勝ってるチームのやることですよ？コレ。この時点で至るまで、何ら効果的な対策も示すこともできなかった指揮官。まだ、そのままでもタイムアップを迎えた方がよかった。出てきた選手たちも戸惑ったんじゃないだろうか。たった5分で何ができるの？ありえない、ありえないよ。これはライセンスがないボクが監督やらされたとしても、こんな起用は絶対しない。いろんな意味での終戦を決定づける、とても辛く悲しい出来事だった。

試合後、ゴール裏のサポーター達が居残りをしたと聞いた。社長が直々に対応したとも聞いた。当然と言えば当然、そして、遅きに失したとも思う。ホームで、そして、わざわざ、『サンクスマッチ』を打ってくださったメイン・スポンサー様の前で見せていい試合じゃない。現地で観戦していた方々の落胆はいかばかりか？そして、選手たちには本当に気の毒な試合だった。

とても悲しい試合だった。さすがに、切り替えもできないし、次節への意気込みも示せないな……。 (ぐん)

●以前の『岐大通』で、「(対岐阜の)戦術のコーティングがなかったら、戦力差では岐阜が優位(だから勝てる試合も多い)」と書いたけれど、長野は対岐阜戦術で来たわけではなかったし、戦力的に岐阜より上だったとも思わない。ただ、明らかに岐阜より上だったのが「チームとして何をやりたいのか」の『完成度』で、さらに練習で作りこんだその完成度を「試合でどれだけ忠実に出せるか」のパーセンテージも長野が上だった。もっとも、岐阜に関しては「チームとして何をやりたいのか」の『完成度』が(選手のインタビューで明らかになっちゃったように)シーズンが半分も終わろうとしているにしては全然なので、「試合でどれだけ忠実に出せるか」も何もあったもんじゃないのだが(苦笑)。

長野と比較して「岐阜には『約束ごと』がないのだなあ」とため息が出てしまったシーンは2つや3つではない。ボールの動きに意図がない。見えない。だから、川西がよく動く。「川西が動く」のは彼のスーパーな戦闘性能の発現である『いい側面』もあるのだけれど、ボールの動きと選手の動きに「約束ごと」がないから、自分に来たパスではない(パスの先には味方がいる)のに動いてしまうという『悪い側面』の発露が何度かあったのが気になった。「フォーメーション」というものがあれば、川西はパスが出た時に別のところにいて別の仕掛けが出来たはずだ。

2点をリードされた時の、「残り数分での3枚替え」にポジティブな要素を見出した観戦者は少数だろう。「万策尽きたから、あとはお前らでなんとかしてこい」というような。いや、果たしてこの試合で「万策」と呼べるだけの「策」があったのだろうか。かくして、一昨年の後半や昨年のように、J2にいた頃のように「はい、相手の方が上でした」という試合を、ホームで、メイン・スポンサー様のサンクス・マッチで見せてしまった。コロナ禍で各業種とも大変な状況になっている中で「来年もスポンサーしよう！」と思っていたくには、これはなかなかハードルが高い。今後でどれだけ挽回出来るか、だ。(吉田鑄造)

【第17節】富山1-2岐阜

●ゼムノビッチ監督の休養が発表された、そのわずか1日後の試合、しかもアウェイ戦。これまでのJでの岐阜は、指揮官が交替した次の試合は、たしか全部負けているという記憶がある。中2日だからスタメンは6名入れ替えてきたけど、ほとんど仲田HCは修正できていないだろうと僕は思っていた。そして実際、前半はひどかった。前線からプレスをかけて富山のボールを奪うまでは良いのだけれど、その後のボールが繋がらない。特に、1トップの#10川西翔太へのロングボールが、ポストプレーを要求するような軌道を描くことが多くて、いや、ピッチ内には#9高崎も#11前田もいないだろうと…。そうすると、前半のうちに富山のCKで、またもファーサイドへ蹴られたボールを決められて失点…何度目なのかは数えるのが面倒なのでやめますが、やっぱり修正できていなかったのは大問題。それと、スローインを出す相

手が見つからずに迷ってるのも気になる。前半は、個人的には「これはアウェイ現地で見なくてよかった」とまで思ってしまうような状況。ところが後半になると、少し状況が変わってくる。縦へのボールが、少しは裏抜けの意図を持って送り込まれ、繋がるように…まあ、比較的よくなったというレベルですけどね（苦笑）。すると後半 60 分、P A 前での混戦から、ゴールラインを割りかけたボールを #15 町田ブライトが折り返し、それを #8 中島賢星がヘディング、ふわりと弧を描いたボールがゴールにすっぽりと収まって…いや、ええんや！どんなゴールでも決まれば 1 点や！（笑）そして一進一退の攻防が続いた後半 78 分、ロングボールに抜け出した #10 川西が、P A 左隅で D F をフェイクで崩した後、ミドルシュートで逆サイドのネットにドカン！逆転ゴール！…完全に鳥取戦の決勝ゴールと同じ、「川西ゾーン」……ええんや！完全な個人技のゴールでも決まれば 1 点や！（苦笑）。その後、再び一進一退の攻防が続く、最後は 5 バックにして逃げ切った岐阜。その際には #15 町田が身体を張って相手コーナー隅でボールを長時間キープ、いわゆる「鹿島る」プレーは素晴らしかった。兎にも角にも結果が必要だった岐阜、修正点は多いと感じたものの、今季初の逆転勝利はチームにも勢いをもたらしてくれると信じています。あと、仲田 H C が守備の細かい指示をずっと出しているのが、T V 越しでも分かった。こういったことも、勝利の要因ではないかなと思う。（ささたく）

●この試合直前に指揮官の休養が発表された。いまさら感、遅きに失した感がありまくりなんだけど、シーズンの残り半分をこのまま続けるよりははるかにマシかな？そのうえで、後任には、決して『攻撃的なサッカー』を標榜しない方を選んでほしい。そんな後ろ向きな感想しか出てこなかったわけなんだが……。ちなみに、個人的な感想だが【休養】というのは『解任も辞任もしない、できない。だけど、今後は任せられない、任せない。』の意だと思っている。ほんとうに体調がよくないのであれば『療養のため』もしくは『病気療養のため』と発表するはず。あくまで、ボク個人の見解であることを繰り返しておきます。

そんな心境で見始めたアウェイ富山戦。さすが、前日に決まったばかりということがわかる前半だった。いや、ホントにひどかった。コレを、まだ見なきゃいけないのかな？とも。ところが、だ。後半アタマからブライトを入れたら、ビックリするくらい状況が一変。そして、そのブライトの献身的なプレーから生まれた賢星の同点ゴール。自ら、翌日の誕生日を祝う一発。おめでとう、賢星！そして、決勝ゴールは 10 番の鮮やかなミドル。それを演出したのはイヨハからの信じられないようなロング・フィード。奇跡的、と言ったら怒られるだろうが、それくらいビックリしたんだよ、ごめんなさい。

しかし、効果的な選手交替なんて今季初めてじゃないか？試合が終わった後、長良川での岩手戦を思い出してしまった。逆の意味で、だけどもね（苦笑）。

正直、勝ち越した後も危ない場面はいくつかあったし、なぜ勝てたのか、よくわからない試合だった。それでも、勝ち勝ち。選手たちに自信が戻ったとしたら何よりの結果。次節につながることを期待したい。あ、でも、失点の場面。アレはない。アレは全くいだけないよ？二度とないようになしてくださいね。（ぐん、）

●D A Z N で視ていて「どうして逆転まで持って行けたのか」よくわからない試合だった。ゼムノビッチ監督と比較するなら、仲田ヘッドコーチには「策」があった。川西の 1 トップには驚いたが、前半はどれだけ世辞でコーティングしてもこれは機能していなかった（苦笑）。でも、それは川西に対するメッセージというか、ある種の『枷（かせ）』だったのかもしれない。「お前は、下がるな」という。

前半の、自陣ゴール正面にブラックホールというかシンクホールというか（苦笑）を作ってしまう守備もだけど、選手が戦っているのはわかるけど戦えてないなあ……まあ、監督休養からすぐだもんなあ……と思っていた。しかし、後半からは川西へのパスがポストプレーではなく裏抜けプレーに変わったり、との修正がなされ、さらには富山は長野ほどの完成度ではなかったこともあって、ケンセーのヘッドに川西の個人技炸裂弾で逆転勝利。希望を持つには早過ぎるけど、絶望するにも早過ぎるのかもしれない。もちろん、2 位との勝ち点差なんか、まだ見ませんけどね（苦笑）。（吉田铸造）

監督交代に寄せて。

●9月25日、休養中のゼムノビッチ監督の契約解除と、仲田ヘッドコーチの監督就任が発表されました。ゼムノビッチさん、短い間でしたがお疲れ様でした。ゆっくりお休みください。

実は就任直後からゼムノビッチさんで大丈夫なのかという不安視する声があったのは事実です。Jリーグの現場から長いこと離れていること、関東リーグの VONDS 市原というチームを率いていた時にチームを JFL に昇格させることができなかったことで、勝負弱さを指摘されていたことなどです。

実際にシーズンが始まってみると、ここまで攻撃の引き出しがない人なのかと落胆させられたこともしばしば……。正直、今年勝ってきたゲームは選手の個の力によるものが大きく、組織の力で勝ってきたのは皆無に等しく、しっかりした組織で戦ってきているチームに対しては、苦戦または敗戦という結果になっています。また先日の長野戦、最終盤の時間帯に 3 人替えなどビハインドの展開であり得ない采配などがあり、このままの形では J2 昇格が遠のくばかり……。監督交代は致し方ないと言わざるを得ません。仲田新監督、Jリーグの監督は初めての就任ですがコーチとして半年間このチームを見てきて、いろいろ思うところはあったはず。これからは遠慮することなく自分の色を出して戦っていただきたいと思います。

正直上位との勝ち点差はかなり苦しい状況ではありますが、まだまだ諦める段階ではないはず。今こそ FC 岐阜に関わる全ての人々が「ICHIGAN」になる時ですよ！（岐阜の誇り）

●9/19(土)に長野戦で敗戦を喫し、9/21(月)に休養が発表されていたゼムノビッチ監督が、9/25(金)に契約解除で合意し、後任には正式に仲田建二ヘッドコーチが就任することがクラブから公表された。

今シーズン当初から、ゼムノビッチ監督に関しては、“2001 年の天皇杯優勝チーム（清水エスパルス）の監督”という肩書きが強調されたように思うのだけど、しかし、清水の監督を退任してから既に 20 年近く。この 20 年間で、サッカー観や戦術が大きく変わっている Jリーグに対応できるのかという不安は、残念ながら現実のものとなってしまった。おそらく、今季の岐阜には『基本ベースとなる攻撃・守備パターンの形』が確立されていなかったと思う。それは、試合を見ていると、明らかに「選手各個人のセンスに任せているなあ」という動きをしていたし、敗戦した際に選手がインタビューで「どうやって攻撃するか共通認識が足りなかった」といったことを異口同音に語っていたことから、たぶん正しいと思う。シーズン序盤は、まだ対戦相手による分析・対策が進んでいなかったからよかったが、徐々に対策がすすんでくると、対戦相手の準備した戦術にはまってしまうと、それを打ち破るためのチームとしての手段を持たない岐阜は、負けるようになっていた。選手個人の能力は高いかもしれないが、チームの総合力で勝てない。特に上位チームには勝てなくなっていた。それが完全に明らかになったのが、ホーム長野戦だった。だから、監督交代はある意味当然というところではないだろうか。

新たに就任した仲田監督は、昨年まで水戸での躍進を支えていた人だ。監督として指揮するのは初めてになるが、その手腕に期待したい。いや、J3 優勝・J2 昇格をかけて臨んでいる今シーズンなのだから、期待するしかない。しかし一方で、チームとしての“積み上げ”が悲しいくらい存在しない現在の状況を解決しないと、今後はどうしようもないという思いも強く存在する。クラブとして『FC 岐阜のチームカラー』を打ち出し、何年もかけて環境を整え、それに合った選手や指導者の獲得・育成をしていかないと、目先の試合だけにとらわれたチームになってしまう。資金が不足していた J 昇格当初は仕方がなかったかもしれないが、現在のチーム状況は、“賽の河原の石”を積み上げていただけだから、という見方もできると思うのだ。（ささたく）

●監督交代について、「意外と早かった」という感想がぼくの周囲には多い。おそらく、トリガーになったのはメイン・スポンサー様のサンクス・マッチでの（スコア以上の）惨敗だろう。ぼくも交代は「早かった」という感想だが、もちろん「遅過ぎだ」という言い方だって出来る。ノン・リーグを視ているサッカー・ファンの間では、関東リーグの VONDS 市原を率いた 2016(平成 28)

～ 2018(平成 30)年の 3 シーズンの戦績や内容から不安視する向きが就任当初から多かった。ぼくもその一人だったのだけど、残念ながらその危惧は現実になってしまった。

監督としての「器」の差を顕してしまったのがホーム岩手戦で、この『岐大通』でも、とてもドローで勝ち点 1 を得たとは思えない辛辣な感想が並んだ。対戦相手の秋田監督が後半から選手交代を含めた鮮やかな戦術対応で局面を一気に優位に持って行ったのに対し、試合の現場での対応力に欠けているように見えた。この岩手戦の前後に行われたアウェー藤枝戦とアウェー相模原戦では戦術的に圧倒されて惨敗（スコアはともに 1-3）しており、それまでの戦い方（勝ち方を含めて）を考えると交代のタイミングはここだったという見解には説得力がある。

今季の F C 岐阜の戦力なら、J 3 で『上位』でいることは困難なミッションではない。戦力のみで勝てる試合も少なからずあるだろう。問題は、今季の F C 岐阜がクラブとして定めた基準が『上位』でも『昇格圏内』でもなく『優勝』だったことで、その過酷なミッションを達成するのに「戦力で勝つことしか出来ない」監督を招聘したのは、クラブのチーム編成部門の認識不足と言わざるを得ない。

無理やりに競馬で喩えれば、ゲートで躓いて加速に失敗、2 コーナー過ぎでは中段の馬群の前目に位置しているが前 2 頭が 5 馬身くらい離している状態。向こう正面に行くあたりで「馬に乗っているだけの騎手から、鞭を持った騎手に乗り替わった（笑）」というところか。仲田新監督の、まさに『手綱さばき』に期待したい。ゴール前の見せ場くらいは作れるかもしれない。前の 2 頭がそのまま行った行ったになっちゃうかもしれないが、そうなったらそれまでの話だ。（吉田铸造）